

CONTENTS COMBAT

2016.Dec.
No.489

12

Cover Design
Favorite Graphics Inc.
Cover Photo HIRO SOGA
Cover Textile Masho Fujiwara
©WORLD PHOTO PRESS 2016
※本文中の価格は消費税込みの
総額表示です。



【第1特集／カモフラージュ】

008 特集 カモフラ大全

Dive Into The World Of Camouflage

- 010 巻頭コラム:迷彩の存在意義
- 012 The Complete Story Of Camouflage
迷彩の歴史
- 026 現用装備、その全容
- 030 写真でつづる! 世界&自衛隊の迷彩
- 036 松原隆 presents! 俺の好きな迷彩
- 043 Green Beret ~迷彩を着こなす男たち~
- 044 米・法執行機関とクライ・プレジジョン
- 048 CRYE PRECISION SET UP GUIDE
- 056 A-TACSが指し示す迷彩の可能性
- 060 最新カモフラ事情 ~光学迷彩~
- 062 ストリートファッションと迷彩
Interview with "DUPPIES"
- 066 珍カモ!
- 068 サバゲ三等兵presents カモフラできるかな
- 074 C☆Mオリジナル迷彩を作ってみました!
- 190 Spin off Column 迷彩と世界情勢

【第2特集／ミリタリー】

- 086 ニッポンのカゴボ
- 090 The Equipments of the U.S. Force
[現用米軍装備カタログ]
第145回Crye Precision特集Part.4
●解説:松原隆 ●撮影:山崎 学

- 117 Militaria Roundup!
ヴェトナム戦争 北ヴェトナム軍/
解放戦線の軍装
●解説:菊月俊之

- 004 COMBAT FRONT LINE
- 078 アホカリブスVNリユニオン2016
●Photos:織本知之/狩野健一郎/編集部
- 100 東京マルイ
GAS BLOWBACK RIFLE
CQBR BLOCK1 ●Photos & Text by Taku
- 104 東京マルイ
BOLT ACTION AIR SOFT RIFLE
M40A5 ●Photos & Text by Taku
- 106 WESTERN ARMS
S&W SHORTY FORTY
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
- 110 WESTERN ARMS
COLT M45A1 CQB PISTOL
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
- 112 WESTERN ARMS
HARDBALLER T1
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
- 114 WESTERN ARMS
BERETTA M92FS LEON SILENCER Ver.
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
- 116 ミリいじ技研 ●by Tomoyuki Orimoto
- 128 PRESENT
- 146 The World Of LITTLE ARMORY
- 148 兵装嗜癖 ●by fujiwara
- 150 Vintage Style by MASH
- 152 WANCHER'S STYLE ●織本知之
- 154 PROJECT NINJA ●morizo(東京装備BAKA)
- 158 NEW GENERATION STYLER ●fujiwara
- 170 トイガンニュース
170 WA スネーク・マッチ1911《カーボンブラックHW》
171 WA コルトM1911A1《パールハーバーVer.》
172 タナカ S&W M360 PD .357マグナム
174 タナカ コルト・バイソン .357マグナム6インチ
《"Rモデル" ニッケル・フィニッシュ》
- 212 Goods & Accessory
- 216 中田商店グッズ
- 218 S&Grafグッズ
- 129 GAME OVER THE TOP
- 132 サバゲ三等兵APS編
- 134 射撃のススメ
- 136 US SHOOTING LIFE
- 138 アラフォース!
- 140 トイガンズ・ジャンクション
- 186 「所さんの世田谷ベース」 アメリカン・ピクニックデイ 2016
- 187 JKGナイフショー&ナイフコンテスト
- 188 編集長日誌
- 193 バックナンバーリスト
- 194 ミリタリー・コレクション
- 196 レア・ミリタリー・コレクション
- 198 A STITCH IN TIME
- 199 ヘンリー少年のミリ雑講義
- 200 狩野健一郎のシネマ放浪記
- 201 狩野健一郎の新作DVD紹介
- 202 蛙のゆびさき
- 204 戦車兵通信 WORLD OF TANKS
- 206 コンバットマガジン・インフォメーション・センター
- 207 読者プレゼント応募方法
- 208 編集後記



DIVE INTO THE WORLD OF CAMOUFLAGE



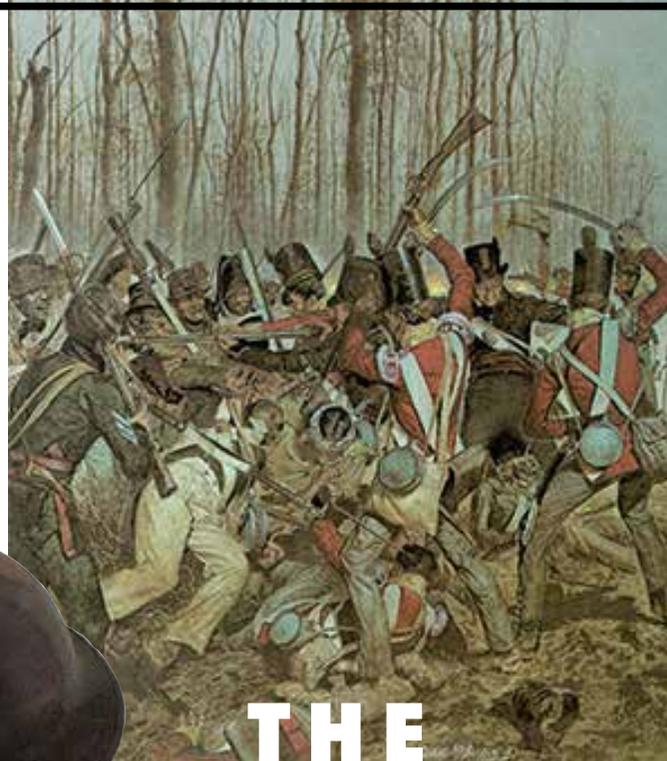
カモフラ 大全

人は進化の過程で、
自らを外敵から隠すための装いを捨ててしまった。
だから隠れるため、人工的に「迷彩」を生み出してきた。
人類の歩みに逆行するかのようその工夫の数々は、しかし、独自に進化を遂げ、
我々の「これから」を指し示す、ひとつのアイコンともなってきた。
生き延びるため、切実な思いから生まれたカモフラージュ。
その歴史と数多い種類を紐解き、さらに、ファッションからのアプローチまで。
これは、テキスタイルにCamouflageされた「真実」を読み解くための、特集だ！



▼
WWIのカモフラージュ

カモフラージュが本格的に使用されるのは第1次世界大戦(1914~18年)からだ。カモフラージュ・スーツの使用はごく限られたもので、ヘルメットにパターンが描かれた程度だった。写真はアメリカ軍のM1917で、3色でパターンを描き、境界を黒で縁取りしている。



◀
**カモフラージュ・スーツ
以前のユニフォーム**

銃器が飛躍的進歩をとげる19世紀後半まで、各国軍のユニフォームは派手な色が使用されるのが普通だったが、これは戦場で敵味方を識別するのが目的だった。図版は米英戦争(1812~14年)を描いたもので、赤い服がイギリス兵。画面左端にグリーンを着たイギリス軍ライフル兵が見える。(U.S. Army)



▲
銃器のカモフラージュ

皮膚と同様に銃器も状況に応じて周囲の状況に合わせてともに、光の反射を防ぐためのカモフラージュが必要となる。ここで示したのは細長く切った布を巻きつける方法だが、これ以外に塗料で直接パターンを描く方法や、泥を塗りつける方法が存在。



①
フェイスペイント

明るい皮膚の色は周囲の状況によっては浮き上がって見える。このため露出した顔や手を周囲の状況に合わせて“トーンダウン(アメリカ軍マニュアルの表現)”させる必要がある。アメリカ軍では第2次世界大戦中に皮膚に直接塗布するペイントを開発し、個人カモフラージュ用装備として支給した。写真は'70~'80年代に製造されたもので、ライトグリーンとローム(肥土色)の2色を1本のスティックにしたものを金属製コンテナに収納している。

カモフラ大全
DIVE INTO THE WORLD OF CAMOUFLAGE
CHAPTER:01

THE COMPLETE HISTORY OF CAMOUFLAGE

迷彩の歴史

現在ではコンバット・ユニフォームの常識となったカモフラージュ・スーツ。

一説によればそのパターンには350種以上が存在するという。

現在はパターンが画一化した感もあるが、かつては国旗にも匹敵する存在だった各国軍カモフラージュ・スーツ。

それに使用されたパターンの数々を紹介していこう。

●Photos: WPPP写真部 ●Text & Construct: 菊月俊之



商品協力:

中田商店 TEL.03-3839-6866
nakatashoten.com

MASH TEL.0120-21-3312
www.mash-japan.co.jp

カンパバタリオン!! TEL.042-309-1911
www.kampfbataillon.com

S&Graf通販部 TEL.072-875-7741
www.sandgraf.jp

PART.1

個人カモフラージュの概念

一口にカモフラージュといっても、その対象は兵士個人のユニフォームから各種兵器に及んでいる。カモフラージュはその物体の形状を見誤らせ、周囲の状況に溶け込ませることを目的としたもので、その起源は自然界に生息する動物や虫に求めることが可能。周囲の状況に応じて体色を変化させるカ

メレオンや、木の枝に擬態するナナフシはカモフラージュの名手だ。

しかし、人間は周囲が状況に応じて体色を変化させたり、違う物体に擬態するのは不可能である。そこで考案されたのが、自然環境の一部となる(周囲の状況に溶け込ませる)効果を作り出すカモフラージュだ。

カモフラージュは一般に「迷彩」と訳されるが、元々はフランス語の“Camouflier”で「変装する」あるいは「偽装する」の意味だ。本稿では各国軍

のカモフラージュ・パターンを紹介していくが、まずは簡単にカモフラージュの概略に触れておこう。

カモフラージュというと、一般には複数の色と様々な模様で構成される迷彩パターンを連想するが、実際のところ、その概念はもっと広い。1968年にアメリカ陸軍が発行したマニュアルFM5-20“Camouflage”には「カモフラージュは戦争の基本的な武器の一つで、それを正しく使うことが勝敗を左右する。そして兵士個人には生死を分



2002年冬、アナコンダ作戦に参加した101空挺師団(空中強襲)の兵士。インターセプターボディーアーマーや防寒着、個人装備はWL、BDUとヘルメットカバーはDCUと現在装備と比較すると雑多な印象を受ける。(U.S. Army Photo)



2001年11月にアフガニスタン南部で撮影された第15海兵遠征ユニット(SOC)の兵士。見てわかるように陸軍とのすぐに見取れる差異は小銃の主力がM16A2かM4A1か位ではないだろうか。(Pacom.mil)



2002年1月、アルカーイダ・タリバン勢力の捜索中のST-3のE小隊。この小隊にはTAGの創業したクリス・オスマンがあり、現地人に過度な威圧感を与えない為にカーキのBDUを着用していた。カーキのBDUはSEALでは個人レベルで見られたが後にその規模は拡大していく。(US Navy photo)

THE WHOLE STORY OF THE LATEST CAMOUFLAGE

現用装備、その全容。

カモフラ大全
DIVE INTO THE WORLD OF CAMOUFLAGE
CHAPTER:02

2001年に起きた9.11テロに端を発したOEF(不朽の自由作戦: Operation Enduring Freedom)と、2003年に米軍の侵攻によって始まったOIF(イラクの自由作戦: Operation Iraqi Freedom)。この二つの戦争を軸にこの16年間に使用されてきた米軍全体のカモフラージュパターンを、魔肖fujiwaraが手がけた伝説の装備系インディペンデント雑誌「Anti Vanilla」で重要なライターとして活躍した筆者が紐解く。

●Photos & Text:JJ

現用装備の全体像

2001年、9.11テロに対する報復の為にアフガニスタンのタリバン、アルカーイダへの攻撃を開始した頃、米軍では80、90年代から使われていたWL(Wood Land)、3C(3 Color Desert)といったカモフラージュパターンのBDU(Battle Dress Uniform)を全軍共通で使用し続けていた。

大きな変化が出てきたのは、2002年に海兵隊がMARPAT(Marine pattern)

を採用してからだと考えられる。

MARPATは2001年にカナダ軍が採用したCADPAT(Canadian Disruptive Pattern)を基にしたパターンで、海兵隊では配色を変えたWLとDesertの2パターンを採用した。

MARPATの採用に伴い、個人装備も従来のWLとDCUからどちらの環境にも適応したココーテブラウンを採用するに至る。2003年3月に始まったイラク戦争では旧来のWL/DCUからの移行中であった為、雑多なカモフラージュ

パターンの海兵隊員が多数見られた。MARPATへの移行は2004年10月に完了している。

2003年、空軍は新型のユニフォームの計画を発表する。プロトタイプとして紹介されたのは青を基調としたタイガーストライプでテストを経て、当初予定では2004年に末までに決定をする予定だったが、大幅に遅れブルーを抑えデジタルパターンに変更されたDigital tiger stripe patternが2007年に採用された。ABUへの移行は2011年に



左は2003年4月、バグダッドで撮影された第7海兵連隊第1大隊の海兵隊員。イラク戦争初期の装備の特徴として侵攻の理由としてWMD(大量破壊兵器)の保有が上げられていた為、ガスマスク、NBCスーツを着用、携行しているのが特徴で、支給の始まったばかりのMARPATはヘルメットカバーとMCCUU(Marine Corps Combat Utility Uniform)は行き渡ってはいなかった。(dodmedia.osd.mil) / 右は2005年ファルージャでパトロール中の第6海兵連隊第一大隊の兵士。この頃になるとMARPATの支給が行き渡り、開戦当初に支給されたIBAもより濃い色に変更されているのがわかる。(Marine Corps Photo)

完了している。

陸軍に目を向けると海兵隊とはまた違ったアプローチで、2004年にUCP(Universal Camouflage Pattern)を採用する。

2002年8月から2004年3月の2年間に渡りナティック兵士研究開発センターはU.S. Army universal camouflage trialsを実施。All Over Brush、Shadow Line、Track、Scorpionを4段階のトライアルを行ない、最終的に市街地用のUrban Track patternをデジタル化したUCPが採用されるに至った。

UCPは自然界に殆ど存在しない黒色を使用せず、グレーを基調にした視覚的に印象の残り辛い迷彩といわれ、様々な環境に適応可能な汎用の高い迷彩パターンとして当時、地域紛争やテロに対して迅速に展開するミディアム旅団戦闘団構想など、世界規模での展

開を念頭に置いた米陸軍の構想とも合致しその効果が期待された。

しかし、兵士たちから好評を得たMARPATと異なり採用当初から市街地以外での効果が芳しくない等、その性能に疑問を持たれる事態に陥る。

2009年10月、米陸軍 PEO ソルジャー(Program Executive Office Soldier)は一部からの批判に曝されていたUCPの再評価を実施。比較対象として「AOR2」、「MultiCam」、「Desert Brush」、「UCP-Delta」、「Mirage」とアフガニスタンで行なった。

その結果、アフガニスタンでの環境により適したMultiCamをOCF(Operation Enduring Freedom Camouflage Pattern)として採用することを決定。MultiCamはU.S. Army universal camouflage trialsに敗れたScorpionを改良したパターンで当時、既に特殊部隊がイラク、ア

フガニスタンで使用していた。OCFのACUは2010年から導入開始されたが、MultiCamを製造するCrye Precisionへのパテント料が高額であった為、全面的な採用には至らなかった。尚、米海軍、空軍も同様にアフガニスタンに於いてはOCFも着用している。

複数年に渡り行なわれていたUCPの全面的な更新を行なうU.S. Army Camouflage Improvement Explainedだが、最終的に4つ候補に絞られた。

「Kryptek Highlander」、「CRYE MultiCam」、「US4CES Transitional」、「Brookwood Transitional」

その後、2013年にはナティック兵士研究開発センターがMultiCamと同じくスコープオンを独自に改良したスコープオンW2を加えた5種での選定の結果MultiCamと同様の迷彩効果を持つ(パテント逃れにしか見えない)スコ

米・法執行機関とクライ・プレジジョン

MULTICAM UNIFORMS

For Law Enforcement Officers

もはやミリタリーユニフォームとして定着した感のあるマルチカムパターンだが、LE(ロウエンフォースメント:法執行機関)にも浸透が始まっている。「クライ・プレジジョン」のとあるPD(ポリスデパートメント:警察署)のSWATチームを取材させてもらった。

●Photos & Text: Hiro Soga

右から、
MultiCam Arid、
MultiCam Black、
MultiCam Tropic、
Navy AOR-2。

カモフラ大全
DIVE INTO
THE WORLD OF CAMOUFLAGE
CHAPTER:05



SWATチームスナイパーのジェイソン・デイヴィス。マルチカム・ブラックは、ロウライト環境や夜間のビルディングからのスナイピングには最適だ。

3種類のマルチカム

「これまでトライしてきたどのユニフォームより機能に優れ、着易く、動き易いのが「クライ・プレジジョン」社のG3シリーズであることは間違いないね。このPDは守備範囲が広く、市街地から山間部まで、いろんな環境の変化がある。我々SWATチーム、特にスナイパーは、サスペクト(容疑者)に知られないようにポジションしなければならないので、カモフラージュの必然性があるんだ」

そう語ってくれたのは、SWATチームのスナイパーを務めるジェイソン・デイヴィスである。

「我々も元々はLAPD(ロサンゼルス警察)に似た濃紺とカーキという2種類の単色ユニフォームを着用していたが、市街地では勿論のこと、乾いた山間部に行くともう目立ってしまうんだな。それで、カモフラージュの世界では第一人者であるクライ・プレジジョン社に相談したら、マルチカムの中でもArid(アリッド:サンドカラー)、Black(黒基調のマルチカム)、Tropic(トロピック:グリーン基調)の3種類を送ってくれたんだ」

マルチカム・ブラックの有用性

「特に市街地で「マルチカム・ブラック」

アホカリプス 2016 VNリユニオン

今年で20周年となる、NAM戦リエナクト・イベント!!

●Photos: 織本知之 / 狩野健一郎 / 編集部 ●文: 編集部



GAS BLOWBACK RIFLE

CQBR
BLOCK1ガスブローバック・アサルトライフル・シリーズ
第2弾モデル登場!!

発売から大人気のガスブローバックM4A1 MWSのシリーズ第2弾モデル「CQBR BLOCK1」がいよいよ発売となる。カービンモデルであるM4A1をさらにコンパクトにしたCQBR BLOCK1は、取り回しやすく、障害物の多いインドアなどの狭い空間で効果的なモデルだ。

ガスブローバックモデルの弱点といえば、気温の低下により本来の性能を発揮出来なくなってしまう事だった。パワーソースにガスを使用するガスガンは、気温の変化に敏感で、寒い冬場はガスの気化効率が低下してしまうため本来の性能を発揮出来なかった。東京マルイでは、新規設計したブローバックエンジンを採用する事で、直径19mmという大型のピストンでありながら迫力のブローバックアクションを実現。これだけ大きなピストンを動かすと、通常は冷えに弱かったりするもの

が、この辺りも見事にクリア。マガジンがキンキンに冷えた状態であっても、通常と変わらない性能を発揮してくれる。

これだけ大きなピストンが激しく前後すると、パーツの消耗や破損が心配されるが、東京マルイでは耐久性についても抜かりはない。衝撃を吸収する独自のショックアブソーバーメカニズム「Z-SYSTEM」を搭載する事で、それに対処している。このZ-SYSTEMがピストンに掛かる衝撃を独特の動きで受け止める事により、パーツの消耗や破損を気にする事なく、迫力のリコイルアクションを実現したのだ。

M4A1 MWS同様、レイルハンドガード「R.A.S.」をはじめ、アッパー&ロアレシーバー、アウターバレル、ボルトなどは金属製で質感、重量感共に申し分ない。耐久性の求められるレシーバーとボルトには、実銃に



フロントサイト・ポストの先はすぐにフラッシュハイダーとなる。10.3インチ・バレルは視覚的にもかなり短い。

も採用されているコーティング塗料として名高い「セラコート」を採用。実銃さながらの仕上がりりとタフネスさを堪能できる。

M4A1 MWSの性能はそのままに、短くカットされた10.3インチ・バレルやLMTタイプのリアサイト、

R.A.S.ハンドガードは上下左右4面にレイルマウントを記している。東京マルイ純正のアクセサリはもちろん、各種実銃用アタッチメントも搭載可能だ。

